

はじめに

近年、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、技術革新等により社会構造は大きく、また急速に変化しており、さらには、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大など、私たちはこれまでになかったような数多くの課題に直面している。このような時代にあって、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことで新たな価値につなげていく力が求められている。

また、学習指導要領の改訂においては、探究的な学習の過程が一層重視され、各教科等で育成する資質・能力を相互に関連付け、実社会・実生活において活用できるものとするのが基本的な考え方となった。「社会に開かれた教育課程」の実現に向けて、探究的な学習では4つのプロセス（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）の質的充実が求められるようになった。

総合的な学習の時間は、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標としている。

これらのことから、本校においては総合的な学習の時間は、これからの時代においてますます重要な役割を果たすものと考え、2年間研究を続けてきた。さらに、多様な課題に対して重点的に対応する力をつけるため、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれらを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成を行ってきている。

また、高学年での教科である、家庭科は、日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、自分たちの生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度を育成する教科であり、今日的な課題の解決に迫ることができる教科であると考え。

本校では、家庭科を柱とし、これまで積み上げてきた本校ならではの生活科・総合的な学習の時間および生活単元学習の実践の見直し・充実とともに、家庭科での学びに繋げていくため、以下の主題を設定し、新たな視点で研究を進めていく。



1. 学校教育目標

～確かな学力・豊かな心・健やかな体を育み、
家庭・地域とともに歩む活気ある学校～

2 研究主題及び研究領域

自らの生活をよりよくしようと工夫する子どもの育成
～主体的・協働的に学ぶ授業づくり～

【研究領域：家庭科】



3 研究主題設定の理由

○昨年度の成果から、魅力的な探究課題の設定の設定と「まとめ・表現」における児童の考えの発信は、児童の主体性を高め、協働的な学習を活性化させ、がく年に応じた探求的な学習の実践につなげることができた。また、児童にとって、

身近な地域における人・もの・こととの出会いや関わりは、自己の生き方を見つめる機会にすることができた。

○一方で、教師が与えた課題に対しては主体的に取り組もうとするものの、活動の中で課題を発見することやその課題に対してよりよい解決方法を見出していくことが難しかった。その要因として、これまでの学習や生活の中において、課題を発見し、よりよい解決の方法を見出し、解決した経験が不足しているのではないかと分析した。

○そこで、今年度は、家庭科は家庭生活を中心とする人間の生活を健康で文化的に営むことのできる能力、生活課題を解決し生活を創造することのできる能力の育成を目指すことから、家庭科を柱として研究を進める。つまり、日常生活の中から課題を見つけだし、生活をよりよくしようと工夫できるよう、経験や体験の機会を多く持たせていく。また、児童一人ひとりにおいて、生活背景や生活基盤が異なるため、解決方法も多様であり、解決方法を話し合いの中、模索していくことにより、児童同士の学びの深まりをねらう。

○子どもたちの主体的・協働的な授業づくりを通して今年度は、研究領域を家庭科に設定し、探究課題の研究を深めていく。「社会に開かれた教育課程」を意識し、研究主題を「自らの生活をよりよくしようと工夫する子どもの育成～主体的・協働的に学ぶ授業作り～」とし、研究の実践を行う。

○多文化共生やインクルーシブの考えを大切にしたい学校風土。商店や駅、文化的、公的な施設、歴史的財産が校区内にある、恵まれた環境。学校運営協議会をはじめ、地域の方々が子どもたちの学びをサポートしよう!という思いが大きい。



○こうした本校の特色、強みを活かし、これまでの



学校をとりまく地域の人・もの・ことを題材に含め、自分の生活の中の身近な魅力ある課題発見し、解決をする活動を行う。主体的、協働的に学ぶ授業を通し、自らの生活をよりよくしようと工夫する力を育てていきたい。この取り組みは、亀山中学校区の研修主題である「自他を認め、ともに学び合い、高め合う児童・生徒の育成」

の目指す姿の実現にもつながっていくと考える。

○21世紀を生き抜く確かな学力の育成には、ICT 機器の活用は不可欠である。個に応じた学びを保証しつつ、協働して学びの質を高めていくために、学びの様々な場面で ICT 機器を活用する。昨年度までのコロナ禍における同時授業配信で培った、ICT 機器の活用の成果と課題を検証し、今後は、年間計画や研究体制を再度検討し、個人の学習の歩みの情報収集や地域への学習成果の積極的な発信、児童間での発表のツール、ICT の活用と人とのふれあいのバランスを中心に取り組みを進めていく。

4 研究主題について

「自らの生活をよりよくしようと工夫する子どもの育成

～主体的・協働的に学ぶ授業づくり～

(1) 自らの生活をよりよくしようと工夫するとは

研究主題の「自らの生活をよりよくしようと工夫する」とは、既習の知識及び技能や生活経験をもとに自らの生活を見つめることを通して、日常生活の中から問題を見だし解決していくことと定義する。家族の生活などの家庭生活に関する内容を主な学習対象として、調理、製作等の実習や観察、調査、実験などの実践的・体験的な活動を通して、実感を伴って理解する学習を行う。学びのふりかえりでは、これまでの生活と照らし合わせ、学習したことを今後の生活に生かせるよう考え、生活をよりよくしていく。そして、子どもたちが生涯にわたって、自立し、共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営もうとする資質と態度を育てる。



(2) 主体的に学ぶとは

「学習へ積極的に取り組むだけでなく、学習後に自らの学びの成果や過程をふり返ることを通して、次の学びに進んで取り組む態度を育む学び」と定義する。子どもたちが主体的に学んでいくためには、課題設定とふり返りが重要となる。子どもたちが主体的に学ぶために、実生活や実社会の問題を取り上げ、それを課題とする。加えて、学習活動のゴールとそこに至るまでの道筋を鮮明に描くことができるような課題を設定する。さらに、子どもに学びをふり返らせることで、新たな課題を見つけるようにし、次の学習につなげさせる。

(3) 協働的に学ぶとは

「協働的に学ぶ」とは、学級の子どもや異学年、地域人材との学びを通して、他者とともに課題を解決することと定義する。協働して学ぶことで、多様な情報に触れ、異なる見方や考え方に気づき、自己の考えを広げ深めることにつなげさせる。また、地域の方々や友だちとの学習により、いろいろな考えを受け入れることができる素地を育成する。



5 主な研究内容

(1) どの教員も即実践できる家庭科等指導案集の作成

① 児童にとって身近で魅力的な学習課題、めあての提示
児童が意欲をもち、「やってみたい」「できそうだ」と思える学習課題を研究する。

子どもとのやりとりの中で学習課題やめあてを提示したときにつぶやきがでる、活動したくて心おどらせる学習課題やめあての提示を工夫する。また、授業の終末には新たな課題を子どもたちが発見し、その課題を子どもたちが問題として扱えるものが望ましいと考える。

②他者とかわるよさを味わえる協働場面の設定



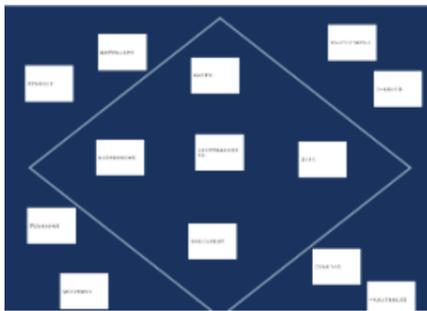
協働場面の具体として、地域の外部講師の方から学ぶ、また、子どもたち同士の意見を交流し、自らの考えを広げる、深めるなどが想定できる。他者と協働することで、新たな学びを子どもたちが体感できるような場面の設定を行う。

具体的には、地域の講師の方から話を聞くことで、より深く理解できたという実感を味わわせる。また、講師の専門性への熱意や人間性等に係る部分を学ぶことができるようにする。

子どもたちの協働的な活動においては、話し合いやペア活動、グループ活動があげられる。子ども同士が協働することにより、人と人が関わりあいながら活動するよさを学ぶことができるように指導する。



③学習効果を高めるICT活用



情報化社会の進展に伴い、ICTは社会の基盤にもなりつつある。子どもたちの未来を見据え、ICTをつかこなそうとする子どもを育成していく必要がある。授業内でICTを活用することは、子どもたち自身がICTの利点を学び、適切かつ効果的に活用しようという態度を育てることにつながる。活用方法は多岐にわたるため、ねらいをもって効果的に活用する必要がある。例えば、教室に持ち込むことができないから写真にする、講師が教室に来られないからオンラインにする、タブレットをもちかえり、調理をする旨の宿題を出し、調理したものを撮影する等の明確なねらいがある活用方法を研究する。

④ふりかえりの交流場面の設定

生活を工夫し、よりよくすることが家庭科の目標である。単元の終末部分ではふりかえりを行わせ、自らの生活をよりよく改善するための方策へつながられるように指導する。

その内容を自己完結をさせるのではなく、交流させることで、言語化させ、生活をよりよくなる資質と態度の育成を図る。

(2) 5・6年生家庭科との円滑な接続のために、家庭科等の内容に係る各教科等との関連を明らかにした年間指導計画の作成。

1年～4年生までは家庭科等に係る各教科の内容を記載する。5・6年生家庭科のどの内容に関わるかを矢印などで明記するなどし、家庭科を柱とした、各学年での系統性がわかる年間指導計画を作成する。

| 教科等 | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|-----------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 家庭科 | 食生活の改善 |
| 国語 | 食生活の改善に関する文章の読み取り |
| 算数 | 食生活の改善に関する数値の読み取り |
| 理科 | 食生活の改善に関する科学的知識の活用 |
| 道徳 | 食生活の改善に関する道徳的価値観の育成 |
| 総合的な学習の時間 | 食生活の改善に関する総合的な学習の実践 |

(3) 家庭科等内容における多文化共生教育の実践

本校は、市内の外国籍児童の拠点校で、さまざまな国につながるの児童が通っている。その本校の特性を生かし、家庭科等の教科においても多文化共生教育を実践する。具体的には、外国の料理や生活習慣などを取り上げるなど、それぞれの違いを認め合える児童の育成につなげる。



令和5年度



研究デザイン



亀山市立亀山西小学校

〒519-0152 三重県亀山市本丸町 585

TEL 0595-82-0139
FAX 0595-82-8720

<http://www.kameyama-mie.jp/kblog/nishi/>

■■■■■■■■ 教育大綱 基本方針 ■■■■■■■■

未来を拓く子どもたちの豊かな学びの実現

□■□■ 亀山市教育関係職員 研修基本方針 ■□■

～一人ひとりの児童・生徒が個性を生きながら
なかまとともに主体的に学ぶために～

- (1) すべての子どもの学ぶ意欲を高め、社会で生きてはたらく「確かな学力」を育てる教育活動をすすめる。
- (2) 教師の授業力向上を追求するとともに、系統的な指導をすすめる。
- (3) 人権を尊重し、なかまとともに、豊かな心と身体をたくみ、自己肯定感・自己有用感を高める教育活動をすすめる。
- (4) 地域の人材や活動を活用し、地域とともに特色ある教育活動をすすめる。